

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「境界域レベルの子どもの特徴と支援」

学習面や行動面で気になる子どもの検査を実施すると、IQ80前後に位置する割合が多くなります。IQだけで知的障害（知的発達症）や境界知能（明確な定義はない）を判断することはできませんが、目安としてはIQ85～114の間にある場合を「平均的な知能機能」、IQ70未満を「知的障害」、IQ70～84場合を「境界知能（境界域レベル）」と呼んでいます。理論上は人口の約14%（20人学級に3人程度在籍）いることになり、発達障害が併存することもあります。

1 境界域レベルの子どもの特徴（一次障害）

- ① 先の見通しを立てられないので、目標に向かって実際に行動することが苦手である。
- ② 理解力・記憶力が弱いため、扱える情報量が少なく、学習の定着に時間がかかる。
- ③ 学習が全般的に苦手で、小学2～3年生頃から授業についていけないが増える。
- ④ 時間・金銭・物の管理、身だしなみ等、生活面の困りごとが目立つ。
- ⑤ 失敗体験の積み重ねや周囲からのからかいから、感情のコントロールが難しくなる。
- ⑥ 困っていても援助要求がうまくできないため、事態が悪化するケースが多い。
- ⑦ 場の状況や相手の気持ちを読み取ることが苦手で、トラブルになりやすい。
- ⑧ 自己肯定感が低く、能力以上のことを要求されると不適応行動が出現しやすい。

2 境界域レベルの子どものメンタルヘルス

- ① 「自分はダメなんだ」と自己肯定感が低くなる。
- ② 何度やってもうまくいかないため、達成感を得にくい。
- ③ 「どうせまた失敗するからやめよう」と意欲が失われていく。
- ④ みんなに笑われそうで怖くて、不安が高まる。
- ⑤ 叱られることが重なり、キレやすくなる。



3 本人の気持ちの変化

〈幼少期・小学生時代〉

- ① 集団活動についていけなくて困っている場面がある。
- ② まだ無自覚ながらも、しっくりこない感覚や違和感を持ち始める。
- ③ 自分は「普通」だと感じている。
- ④ 頑張っって追いつきたいと思っている。



〈中学生・高校生時代〉

- ① 授業や集団活動等で失敗経験が多くなり、困ることが続く。
- ② 他者との違いに敏感になっていくので、自分はダメな人間なんだと劣等感が強くなる。
- ③ みんなと同じようにできなくなるので、恥ずかしさや情けなさを感じる。
- ④ できないことを隠そうとする。

例：友達との会話についていけないときに、「そうだね」と取り繕おうとする。

4 境界域レベルの子どもの二次障害（理解や支援不足で起こる）

- ①イライラしやすくなる。
- ②自己肯定感が低下する。
- ③体調不良（頭痛や腹痛、吐き気）やメンタルヘルスの不調（抑うつ、不安）を訴える。
- ④不登校や引きこもりの状態になりやすい。

5 どんな支援が必要か

- ①実態把握を行い、全般的な知的発達水準を明らかにする。
 - ・「授業についていけない」ことの背景として境界知能が考えられる場合には、SEN 児童生徒チェックリストや知能検査を実施し、発達のアンバランスなのか、発達が緩やかなのか、客観的な実態把握を行う。一般的な特性として、発達障害では得意・不得意がはっきりしている場合が多い。一方、境界域レベルの子どもは、個人内差が少なく、全体的に数値が低くなる。
- ②学習面も生活面も、80%の目標設定を心掛ける。（平均を目指すのではなく、子どものペースで）
 - ・1の「境界域レベルの子どもの特徴」で触れたように、先の見通しをもつ力、理解力や記憶力が苦手であると、様々な場面で平均以上の力を発揮するのが難しい。平均以上の点を期待すると、過度のプレッシャーをかけることになる。IQが70～84で境界知能に該当する場合は、平均に比べて70～84%の認知能力があるというイメージになる。無理をせず、平均点の7～8割を目標にして、自分のペースで学んでいけるようにする。
- ③必要に応じて「合理的配慮」を提供する。
 - 困難1：周りの刺激に気が取られて、板書を見ることに集中できない。
 - 配慮1：黒板付近の掲示物を減らす。座席を2列目にする。チョークの色を変えたり、線で囲んだりする。聞くと書くを区別して集中できるようにする。
 - 困難2：読むのが苦手で、テストのときに問題文を読み取ることにかかる。
 - 配慮2：試験時間の延長や問題用紙の拡大、ルビを入れることを検討する。
 - 困難3：口頭で発表する課題が苦手な発表内容を覚えられず、スムーズに発言できない。
 - 配慮3：発表内容を覚える形ではなく、事前に用意した文章を読み上げる形でもよいことにする。または文章を書いて提出することも認める。

境界域レベルの子どもは、特別支援学級や通級による指導、通常の学級で支援員のサポートを受けていることが多いと思います。特に通常の学級においては、目標を低めに設定して、全員に同じ教え方をして、同じプリントを配って、同じ宿題や課題を出すのではなく、保護者と実態を共有しながら、復習用のプリントを配ったり、難易度の低い課題を出したりして個別の配慮を行います。指導の基本は、「子どものレベルに合った具体的な課題を細かく、少なく」、そして「体験的な方法で、ゆっくり・ていねいに」です。なお、境界域レベルの子どもの指導は、教師の力量が最も反映されると言われています。

※参考文献 著者：梅永雄二 「教師、支援者、親のための境界知能の特性と支援がわかる本」



とれたて直送便



ほめるときのポイントは「目」

子どもをほめるときは、眼輪筋（目の周りの筋肉）を動かすこと。大きく見開いて驚いたり、目を細めて喜んだりする。子どもに「すごい」とほめる場合は、①高めのトーン、②うなるように低く、③「すごーい」と長めに、④繰り返す、⑤ジェスチャーを付ける、⑥スキップしながら、⑦「すごげー」と言い換えなど、子どもに伝わる工夫をする。